記憶戦争※)

—— Remembering and Forgetting ——

ウォンヨンジン
元 容鎭
（西江大学）

1.　記憶の地形学（Cartography）

「記憶」を整理することから始めよう。記憶は様々な直接経験と間接経験の組み合わせであり、構成物である。記憶にはすくい上げたこともぎっしり詰まっているが、その反面、捨て去ったものでごみごみもしている。デリダ（J.Derrida）式に言えば、記憶は忘却の痕跡（traces）だ。選択（記憶）と排除（忘却）に基盤を置いて作られているせいで、記憶は多声的（heteroglossia）であることから免れない。いくつかの声が背後に混ざっているのである。記憶の中の多声は背後に混ざっているが、一糸乱れずの状態だ。記憶の中の多声は、位階的（hierarchic）というわけだ。特定の記憶が違う記憶を抑圧する。そして、なかなかその位階は崩れない。位階をぎゅっと縛りつける力があるのである。時には、その力が揺さぶられたり、自然に弱くなったりして記憶の位階に亀裂が入ったりもする。

簡単に説明したが、上記の記憶に関する言及は少なくともいくつかの主要概念（出来事）が込められている。選択と排除、多声性、位階性、競合性。記憶の地形学は記憶過程の中で繰り広げられる出来事を扱う作業である。ところで、上記で言及された概念（出来事）の背景には、それを動かす力（vector）が存在する。すなわち、記憶の地形学を動かす力（背景）が存在するのである。記憶と関連した大部分の理論は、その力に対して冗長な議論を繰り広げる。日本のお盆を例に挙げてみよう。町、時期、個人によって少しずつ違う記憶を持っているが、大部分の日本人が共通して持っているお盆があり、その記憶を強制する力が存在する。その力は国家によるものなのか、そうでなければ、ただ人々が集まって暮らしている共同体によるものなのか、またはすべての日本のお盆を見せてくれるテレビによるものなのか。その質問に答えることが、すなわち記憶の地形学なのである。記憶の地形学は、上記 4 つの概念（出来事）そしてその後ろにある力を扱うのである。それでは、なぜ記憶の地形学はそのような複雑な姿を備え繰り広げるのであろうか。

実は、記憶の議論に関しては、あるフランスの思想体系が顕著に引用される。ここでは、長く説明しないが、何人かの思想家の名前と主要概念には言及する必要がある [1)]。記憶と関連して必ず挙げなければならないのがアルブヴァクス（M.Halbwachs）である。彼は、デュルケーム（E.Durkheim）と同じ学校に勤務しており、彼から多くの影響を受けたと告白した [2)]。Durkheim の主要な関心事は「社会的なこ

※）本稿作成にあたっては、韓国研究財団の助成を受けた（NRF－2013S1A2A1A01034453）。ここに記して感謝したい。〔This work was supported by the National Research Foundation of Korea Grant funded by the Korean Government（NRF－2013S1A2A1A01034453）〕

と（the social）」であった。彼は「社会的なこと」を支えるものとして「連帯（solidarity）」を挙げた。「連帯」と「社会的なこと」を通じて「人々がどのように社会を構成し生存するのか」という問題に答えようとした。生存という概念で社会を解こうとしたのである。以後、彼の後輩たちは二つに分かれてこの問題を解こうとしている。一つ目は、誰かがつくってくれた連帯を通して社会を構成し生存するという結論を出した側である。国家が間に入って人々を編成し社会を構成するそのような方式を意味する（ホッブズ（Hobbes）派）。二つ目は、集団は人間の連帯を生来的であると見た（スピノザ（Spinoza）派）。人間が調和して暮らす集団を象徴するために作ったトーテム（totem）がその例だ。トーテムと同じ集団表象（collective representation）をつくるのは、それを通して連帯して生存を維持するためである[3)]。

以降、フランスの思想家たちはこの二つの流れの中、どちらかに立つかまたはこの二つを混合して作業を遂行してきた。記憶研究を早々と集大成したアルブヴァクスは、その二つを弁証法的にまとめようとした。ドゥルーズ（G. Deleuze）やガタリ（F. Guattari）も、生来的に共同記憶を構成して生きて行こうとする人間へ(国家や政治)権力がつくった記憶が近づき権力を行使することを暴露した。フーコー(M. Foucault）の作業（popular memory）もそのような系列に含まれる。記憶と関連して、フランスの最も大きなプロジェクトであるピエール・ノラ（Pierre Nora）の「記憶の場所（Les Lirux de Memoire)」もその一環である。このプロジェクトは、社会構成員たちが「記憶しお互いに記憶を分けて持つ。ゆえに存在する」と述べている。その生存のための記憶プロセスに、国家も干渉し、テレビ・新聞も干渉し、個人も学校も干渉する。社会が持った記憶は喧しく､社会によって違い､時には変わることもある[4)]。長々と説明したが、社会の存在、持続は記憶とともに成り立っている。そして、記憶の地形学を見ることは、社会の流れを知ろうとすることであり、社会内の力の方向を点検することでもある。

2. ヨーコの記憶

2013年7月、日本のハート出版は『竹林はるか遠く―日本人少女ヨーコの戦争体験記』という本を翻訳出版した。原題は『So Far From the Bamboo Grove』であり、米国で出版されたのが1986年であるから、27年ぶりのことである。英文だということはあるが、日本人少女が書いた自叙的引揚げ小説であり､この本が米国でいくつかの賞を受賞したことを考えれば､翻訳が遅くなったことは意外である｡ハート出版のホームページを見てみると、いくつかの引揚げ小説、手記が一緒に紹介されている。「大東亜戦争」という単語を含めた題名の本もいくつかある。元来、この本は日本で出版禁止を受けたという話が流れた[5)]。しかし、本の広報および広告には日本での禁止よりは韓国での販売禁止情報がより多く聞こえて来た[6)]。27年という長い年月の間忘れられており、韓国での事件のせいで日本で脚光を浴びた本であると推定される。

韓国ではこの本はどのような扱いを受けたのだろうか。2005年に韓国で翻訳出版されたこの本は、出版社の決定によって2007年に姿を消した。出版社が販売禁止措置を行ったのである。出版社の決定に一番大きな打撃を与えたのは、韓国のマスコミだった。2007年1月から、韓国の新聞と放送はこの本と関連した米国発の報道を伝えた。米国の中学校内で、この本は推薦図書として選定されたが、コリアン・アメリカン（Korean American）の学生たちが本の内容に対して問題を提起する事件が発生した。

学生に同調した保護者たちが選定撤回を要請した。2006 年、米国で発生した不満、撤回要請の話が、2007 年初めに韓国に伝えられた。不満は、主人公の少女ヨーコが戦争後に韓国を離れるとき、軍服姿の朝鮮人男性たちによって性暴力の脅威を受けたという部分に向けられていた。韓国が被害者であり日本が加害者であると思っていたが、この本は自身の記憶に違反しているという行為だった。

米国での指摘・抗議は、米国内の教育機関による本の検討へと続いた。韓国内の反応はそれよりも激烈だった。連日に渡って本を批判する報道が続いた。本の内容を歴史的事実（fact）と照らし合わせることも行われた。文学雑誌もこの本を検討し、議論し始めた。原著者であるワトキンス（Kawashima Yoko Watkins）さんをインタビューした。ワトキンスさんは、米国と韓国での抗議についても、自身の経験をあるがままに話しただけであり、韓国国民を貶める意図はなかったと明らかにした。ワトキンスさんと似たような立場にいた韓国の出版社は何度も釈明書を出したが、結局 2007 年 1 月に販売を中止する決定を下した。この本によって他の本の販売も被害を受けるかもしれないという思いからだろう。事実、出版社はある程度そのような抗議があるだろうという予想をしたようだ。出版社は原本とは違う題名と表紙を選択した。

原著の表紙には（国籍不明の）共産軍と爆撃によって脅威を受ける女性が描かれている。この表紙には「男性の暴力によって脅威を受ける女性」を強調している。しかし、韓国版の表紙には、その内容は消えている。モンペを着た（ヨーコと推定される）幼い少女が比較的明るい表情をしている。これは原題とは何の関連もない。表紙の裏面には「なぜ日本と中国政府はこの本の出版を禁止したのか？」という文句が大きく差し込まれている。この本が反韓的な内容ではないことを強調したい欲望が表紙に詰め込まれていた。そのような装置にもかかわらず、出版 2 年後に、約 3000 部の販売実績を残したこの本は韓国の書店から姿を消した。

この本の中の記憶を支えるために韓国は努力し続けている。韓国内では一段落したが、米国での記憶戦争はさらに激烈になる。そして、そのニュースは再び韓国にフィードバックされた。政府まで出てきて、米国内のいくつかの地域に推薦図書選定取り消しを要請しもした。韓国人が犠牲者であるという記憶叙事の主張は、慰安婦問題とも相まって始まった。2007 年 1 月 31 日、マイク・ホンダ（Mike Honda）議員が「日本政府の慰安婦妄言に関した公式謝罪を要求する決議案」を連邦下院に発議した[7]。この後、韓国メディアは被害者韓国と軍慰安婦、そしてヨーコの話を接合させた。次第に、ヨーコの話はその信憑性に傷がつき、韓国からの主張そして米国に対する韓国の要請は弾き返された。「真の被害者はまさにわれわれだ」。

日本の翻訳本の表紙からも出版の意図を読み取ることができる。帯には主人公の少女の写真と彼女が大変な思いをしながら生きた朝鮮の羅南時代の粗末な建物が登場する。幼い少女の写真が引揚げという文句と並んで登場する。帯がない表紙には初めから写真がない。原題に近い翻訳の題名だけ登場する。米国と韓国で起こった事件を経た後に出版されたので、広告にはそのことに対する言及が強く表出される。しかし、表紙にはそのような部分を省略して少女の戦争体験という事実だけ明記されている。戦争以後、引揚げた少女の体験記であることを淡々と語り、広告を通して韓国によって排斥されたことを伝える。原著がワトキンスさんの意図である「ヨーコは戦争の犠牲者だった」という主張を延長している。ワトキンスさんは日系米国人だったが、ヨーコは日本人として読まれるようにしているのである。

米山リサ（トロント大学アジア学部教授）が米国内のヨーコ事件をうまく整理している。米国での事件は、米国の多文化政策の盲点を表している。米国は、アジアを一つとして把握する。モデル・マイノリティ（Model Minority）集団として眺める観点や、過去に Yellow Peril（黄禍）として見た観点もアジアはアジアであるだけだ。その中の人々がお互いに違う記憶を持っているという事実には関心がない。しかし、韓国と日本は米国を審判者に設定して自身の記憶を競争させ、それぞれが被害を受けた事実を強調した。ヒロシマのキノコ雲と引揚げ手記や小説の中で、爆弾を受け、倒れ死に、性暴力を受けた日本人が続いた。彼らが日本を離れた話は減り、戻る話は長くなる。韓国は、日本軍慰安婦のおばあさんを前に立て、被植民地の経験を広げるのに忙しい。韓国国内で慰安婦のおばあさんを語ることよりも強いトーンでより頻繁に米国に向かって語る。甚だしくは、独島と関連したキャンペーンが米国内でより多く繰り広げられたのである[8)]。日本と韓国はお互いに「われわれのほうが被害者だ」と言い、米国に訴え、審判を受けようとする―「犠牲者と民族主義」。

二つは犠牲者民主主義を基盤として犠牲の記憶を解き放つ記憶競争に立ち入っている。そのおかげで、戦争中に女性に加えられた暴力は息絶えさせられた。朝鮮半島内の日本人妻に関する議論も頭をもたげることができない。解放直後に彼らに対して加えられた社会的待遇は忘れられて久しい。その記憶は被害者韓国の記憶に挑戦しなければならない冒険の記憶である。日本軍慰安婦の議論になる前に、日本軍慰安婦が韓国社会でどのように描かれていたのかは、すでに多くのことを見せてくれた。羞恥の領域だったそれらは犠牲者民主主義と結合された。日本は、11 歳の少女を強調するだけであり、小説を書いた人がワトキンスであることを完全に消し去った。実は、ワトキンスが童話として描いたのは巧みな創作戦略と読まれた。彼女がなぜ朝鮮にいたのかを説明する説明責任（accountability）を避ける戦略だった訳である。そして、日本の出版社は表紙のデザインを通して彼女をうまく活用した。少女の記憶というだけなのだと言ったのである

韓国は、1945 年以前を記憶の主な内容としており、日本はそれ以降を記憶の内容としている。そして、その記憶を前景化して国内外へ知らせ、既成事実化する。米国では、その区分なく植民があり、戦争がありその後に苦痛があったことを記憶しようとする。

ヨーコの話は米国、韓国、日本を経ながらトランスナショナルなテキスト（transnational text）になる。しかし、各国家の経済の中では、国家的、ローカル的テキストになる。多様な記憶の衝突ではなく支配的記憶によって一色化されてしまう。そして、自身の叙事を基盤としてそれを再びグローバル化しようとする。特殊な記憶を普遍的記憶へ変えようとする意志を表している。記憶戦争を起こし、それに政府もメディアも読者もすべて動員されている。しかし、その競合は大体米国に向かっており、その中心地（米国）の判定を歴史的真実にしようとするマゾヒズム的意図を表している。

3. 慰霊と混沌

少し前に高倉健が熱演した『ホタル』（2001 年、東映映画社）は、映画以上の役割をした。まず、朝鮮人特攻隊員がいるという事実を大衆的に知らせることに寄与した。その存在に対する日本の反応は様々だったが、歴史的事実を大衆化したことには間違いない。二つ目に、その存在を扱う方式を規定する効

果があった。この映画以降に朝鮮人特攻隊員を記憶する方式はひとつ、つまり慰霊と同一である。このような日本国内の統一された記憶方式である慰霊は、以降、韓国内の記憶方式と幾度となく葛藤を起こした。

1984 年、鹿児島県の知覧で朝鮮人特攻隊員の慰霊祭が開かれた。『ホタル』には、物語の主な人物であった特攻隊員の下宿が出て来るが、その主人である鳥浜トメさんも参加した。毎年行事が行われ、マスコミの関心も引いた。しかし、慰霊碑をめぐって葛藤が発生した。葛藤の原因は、慰霊碑に入る「文句」だった。遺族側と日本側のそれぞれが、朝鮮人特攻隊員の死を違うように規定した。それぞれが違う慰霊の概念を持っていたのである。遺族の場合、特攻隊員の「意味のない死」に対する憤懣を強調した。日本側はそれとは違う方式の慰霊を望んだ。慰霊碑建立に対する攻防が続き、建立計画は霧消した。そして 1999 年、知覧に「アリランの碑」という歌碑が建立される。この碑石の建立は日本の篤志家によってなされ、韓国の遺族は建立時に招請されなかった。碑文の内容[9]は慰霊ではない方式を取っていたが、日本式慰霊の代わりに書いた碑文だと読まれる余地が大いに残る。

2001 年の『ホタル』の実際の主人公は光山文博少尉（本名は卓庚鉉）である。上記で言及した 1984 年の慰霊祭にも彼の遺族は参加した。「特攻の母」と呼ばれ、映画と慰霊祭にすべて登場する鳥浜さんと光山は特別な事情を持っていた。光山は鳥浜さんの記憶によって発見された人物でもある。鳥浜さんは、戦後に NHK の尋ね人番組を通して彼のことを伝え、彼の家族を探した。それによって、光山と朝鮮人特攻隊員の存在が知られるようになる。他の戦没者と合祀された靖国神社で、1984 年の慰霊祭で、2001 年の映画『ホタル』で、彼が歌ったという出撃前日のアリランを刻んだ「アリランの碑」の中で、彼は他のどんな朝鮮人特攻隊員よりも多くの慰霊を受けた。日本人が最も記憶しやすい朝鮮人特攻隊員の叙事を持っているからである。

『ホタル』の最終シーンで、朝鮮人特攻隊員（金山）のフィアンセだった知子と夫の山岡が韓国を訪問する。遺族に金山の遺品を渡すためであったが、遺族の中の何人かは受け取りを拒否する。金山が日本のために特攻に志願したはずがないと、特攻への参加を強く否定し、日本による強制だったと主張する。山岡は家族と朝鮮民族のための犠牲だったと強調する（強制でも志願でもなかったと言いたかったのである）。金山は時代の犠牲者へ変わり、家族にも受け入れられ、最終シーンでは故郷の丘にホタルになって帰ってくる。特攻隊員はあまりにも幼く、また朝鮮人特攻隊員がアリランを歌ったという事実を鳥浜さんが証言しながら、彼が時代の犠牲者であることが再び強調される。時勢の犠牲者である朝鮮人特攻隊員は靖国神社に合祀され、神として祀られて慰霊され、遺族もまた彼を受け入れて和解するように語られるわけである。このような点において、彼は常に朝鮮人特攻隊員の代表格であった（光山は韓国で最も多く取り上げられた朝鮮人特攻隊員である）。

映画とは異なり、光山の本当の故郷は慶尚南道沙川（サチョン）である。その沙川に彼の魂を帰郷させようという、まるで映画のようなことが実際に起こった。2007 年 8 月から知韓派女優の黒田福美氏は、光山の故郷に帰郷碑を建てようと動いた。韓国の政府機関である韓国観光公社は広報を支援し、沙川市は碑の建立のための土地を提供するという約束までしていた。沙川市長は黒田氏の話を聞き、碑を建てる土地と予算の一部を提供すると約束した（沙川市長は軍人出身の公務員で、卓庚鉉と同じ西浦里出身だった）。2008 年 3 月、東京で韓国観光公社の支援の下、帰郷碑建立計画に関する記者会見が開かれた。そして

同年5月、沙川市で建立紀念式が行われる予定となった。

建立紀念式に至るまでの間、黒田氏は記者会見やインタビューなどで碑の名称についてさまざまな呼称を使用していた。黒田本人の意図だったかもしれないし、彼女の言葉を伝えるメディアの問題だったかもしれない。メディアでは帰郷碑、帰郷紀念碑、帰郷祈願碑、碑石、追悼碑などと多様な名称が使われていた。2007年、碑の建立を計画した際の有力な名称は、碑石か追悼碑であった。しかし時間が経つにつれ、慰霊碑という言葉が多く使われるようになっていき、最終的には帰郷祈念碑に決まった。これに関する説明はなかったが、両国での受け入れ方をめぐる苦悩の末に出された結論だったと思われる。慰霊という言葉は韓国では誤解を招きかねないと考えられたであろう。

『竹林はるか遠く―日本人少女ヨーコの戦争体験記』の事例から韓国の被害者としての記憶がどれだけ強硬かを読み取ることができる。ゆえに、本書が販売禁止になるまで、社会的に大きな議論もなかった。本書の内容に不満を持つ同胞の少女を韓国に招き、英雄として迎えたときまでも問題はなかった。被害者としての民族主義的記憶の強硬さゆえである。日本も同様であった。ヨーコが引揚げとつながったとき、とくに社会が保守化していった時期の2013年に紹介され、「終戦」時の苦痛の記憶は共感を得る。韓国の記憶よりもっと多くの同意を得て、グローバルな舞台に出ようとしていた。『竹林はるか遠く―日本人少女ヨーコの戦争体験記』をめぐる、一糸乱れぬ記憶に比べれば、卓庚鉉の記憶は請われた鑑のような様子を持っている。実際、韓国において卓庚鉉、つまり朝鮮人特攻隊員は浮遊する記票のような存在だった[10]。彼が具体的な姿で近づいてきたとき、韓国は彼の存在をどのように扱いべきかをめぐって混乱した。

黒田によって計画された碑の建立は、2008年5月の除幕式当日に挫折する。黒田に協力を約束した沙川市長が2008年4月、沙川市議会で支援に関する事後報告を行った。市議会は、事前に承認を得ていないと強く抗議した。慶南・蔚山（ウルサン）地域光復会会員と沙川市民社会団体などで除幕式を中止させようとした。除幕式当日の現場で相反する二つの団体は、異なる理由で反対した。光復会は「カミカゼ」の「親日」論に注目し、市民社会団体は市長の専横を問題視した。地元テレビ局の晋州MBCがこれを全国ニュースへ発信すると、慶南地域のマスコミと一部の大手マス・メディアがこの葛藤を取り上げた。しかし、厳密にいうと、日韓両国のマス・メディアは、2007年8月に黒田氏が建立計画を発表したときから、2008年5月に建立が挫折したときまで、この事件をたびたび報じていた。この事件を取り上げた日韓のマス・メディア報道を調べると、次のとおりである。

＜表1．事件以前の報道（2007年8月18日～2008年5月6日）計19件＞

日本（7件）

日付	新聞社	記事の種類	記事の見出し
2007/8/18	朝日新聞	報道	朝鮮人特攻兵の石碑を故郷に　女優の黒田福美さんら計画
2007/11/3	産経新聞	コラム	＜ソウルからヨボセヨ＞　黒田福美さんの夢
2008/3/11	東京新聞	報道	日韓をつなぐ「平和の礎」に　韓国に朝鮮人特攻隊員の慰霊碑　女優・黒田さん奔走し建立へ

2008/3/24	産経新聞	報道（共同通信の配信記事）	韓国に朝鮮人特攻隊員の碑　日本人女優、建立呼び掛け
2008/3/24	高知新聞	報道（共同通信の配信記事）	韓国に朝鮮人特攻隊員の碑　日本人女優、建立呼び掛け
2008/3/24	四国新聞	報道（共同通信の配信記事）	韓国に朝鮮人特攻隊員の碑　日本人女優、建立呼び掛け
2008/5/2	毎日新聞	報道	戦死した朝鮮人特攻隊員の慰霊碑　黒田福美さん尽力

韓国（11 件）

日付	新聞社	記事の種類	記事の見出し（原文は韓国語）
2007/8/20	ソウル新聞	コラム	（東京発）韓国に「朝鮮人特攻隊員」追悼碑を建てる日本の女優黒田／「太平洋戦争の悲劇、色褪せては…」
2007/9/6	慶南日報	報道	「魂だけでも故郷に埋めて」/ カミカゼ韓国人、故郷の泗川に帰る / 日本の女優を通じ故卓庚鉉氏、故郷を訪ねる
2007/9/27	慶南新聞	報道	泗川、カミカゼ特攻隊委員卓庚鉉の追悼碑建てる
2007/9/27	東亜日報	報道（聯合ニュースの配信記事）	日本の女優、泗川へカミカゼ隊員の追悼碑建てる
2007/9/27	東亜日報	コラム	「夢に見たカミカゼ朝鮮青年、16 年間目に焼きついた」/ 特攻隊員卓庚鉉の追悼碑建てる親韓派の女優黒田氏
2007/9/27	国際新聞	報道（聯合ニュースの配信記事）	泗川へカミカゼ隊員の追悼碑…日本、女優
2007/9/28	慶南道民日報	報道	夢で会ったカミカゼ朝鮮青年を忘れられず
2008/3/11	韓国日報	報道	（東京発）カミカゼで犠牲となった韓国人卓庚鉉氏の慰霊碑故郷へ / 親韓派女優、黒田福美氏推進
2008/3/25	東亜日報	報道	（東京）カミカゼ朝鮮青年の魂、ひと月後に故郷へ行く / 日本の女優黒田福美氏、特攻隊員卓庚鉉氏の追悼碑 5 月に泗川市で除幕
2008/3/25	ソウル新聞	報道	（東京）慶南泗川に慰霊碑建てる日本の女優黒田福美氏 /「カミカゼで死んだ朝鮮人兵士の魂を慰める」
2008/4/29	慶南日報	コラム	卓庚鉉の場合

＜表 2　事件当時および事件以降の報道記事（2008 年 5 月 7 日～ 6 月 3 日）合計 31 件＞

日本（10 件）

日付	新聞社	記事の種類	記事の見出し
2008/5/10	毎日新聞	報道	朝鮮人特攻隊員慰霊碑の除幕式中止…地元団体抗議で（現地取材）
2008/5/10	産経新聞	報道	女優・黒田福美さん「無念」 特攻隊員碑の除幕式中止（現地取材）
2008/5/11	朝日新聞	報道	特攻隊碑、撤去へ　除幕式直前に「親日」批判 （現地取材）
2008/5/11	西日本新聞	報道	日本人の参拝阻止　韓国・特攻慰霊碑問題　泗川市の反対住民ら （現地取材）

2008/5/16	朝日新聞	読者投稿	朝鮮特攻隊兵碑　撤去するとは
2008/5/22	朝日新聞	寄稿	慰霊碑撤去　無念だが、日韓交流手応えも　黒田福美
2008/5/23	東京新聞	コラム	和解への思い通じず ※東京新聞と中日新聞は同系列紙
2008/5/23	中日新聞	コラム	和解への思い通じず ※東京新聞と中日新聞は同系列紙
2008/5/26	毎日新聞	コラム	韓国三昧：日韓のはざまでさまよう魂　堀山明子
2008/6/3	産経新聞	コラム	（ソウル支局長黒田勝弘）朝鮮人特攻隊員の心

韓国（21 件）

日付	新聞社	記事の種類	記事の見出し（原文は韓国語）
2008/5/7	慶南新聞	報道	泗川市 西浦面　カミカゼ卓庚鉉　帰郷祈念碑論争
2008/5/7	慶南道民日報	報道	“ カミカゼ特攻隊員の慰霊碑はだめだ ”
2008/5/7	慶南道民日報	報道	強制徴用された朝鮮人青年卓庚鉉の慰霊碑論難
2008/5/7	国際新聞	報道	韓国人カミカゼ慰霊碑建立論難
2008/5/7	泗川新聞	報道	慰霊碑除幕と撤去を前に光復会会員、抗議で泗川市長と面談
2008/5/8	慶南道民日報	報道	“ 泗川市のまちがい、慰霊碑建立論難 ”
2008/5/8	泗川新聞	報道	カミカゼ特攻隊員卓庚鉉の慰霊碑建立反対
2008/5/9	慶南道民日報	報道	泗川 カミカゼ慰霊碑 除幕式留保
2008/5/10	ハンギョレ新聞	報道（聯合ニュースの配信記事）	慶南　泗川市　市民団体　“ カミカゼ慰霊碑絶対反対 ”
2008/5/10	慶南新聞	報道（聯合ニュースの配信記事）	泗川　市民団体　“ カミカゼ慰霊碑、絶対だめだ ”
2008/5/10	朝鮮日報	報道（聯合ニュースの配信記事）	慶南　泗川　市民団体　“ カミカゼ慰霊碑絶対反対 ”
2008/5/14	東亜日報	報道	カミカゼ朝鮮青年卓庚鉉慰霊碑　必ず撤去しなければならないか？
2008/5/15	慶南道民日報	コラム	卓庚鉉慰霊碑　論難報道
2008/5/15	慶南新聞	報道	泗川　カミカゼ慰霊碑撤去 / 市民団体の反発で…市、予算 1300 万浪費
2008/5/15	泗川新聞	報道	カミカゼ出身卓庚鉉慰霊碑、撤去しなければ泗川市長の “ 住民召喚 ” も辞さない！
2008/5/22	泗川新聞	報道	カミカゼ慰霊碑けっきょく撤去
2008/5/23	慶南道民日報	コラム	＜取材ノート＞民意無視した慰霊碑建立
2008/5/27	朝鮮日報	コラム	撤去された “ 日本徴兵　特攻隊員の慰霊碑 ”
2008/5/29	国民日報	インタビュー	“ 太平洋戦争で犠牲になった韓国人の魂を称えたい ”/ 日本の女優 黒田福美氏、祈念碑推進
2008/5/29	ソウル新聞	インタビュー	韓国人カミカゼの慰霊碑論難　日本の女優、黒田氏泗川へ建立…光復会の反対で撤去
2008/6/2	中央日報	コラム	卓庚鉉

日本の新聞と韓国の全国日刊紙には情緒的一致が目立つ。記事を抽象的に書きながら和解に焦点を当てている。韓国の記事には、日本でいう「時代の犠牲者」という点に同意するようなものが多い。黒田氏が直接投稿したりインタビューしたものが多いことも目立つ。それに比べて、韓国の地方紙（特に地元紙）は、特攻隊員の親日性、歴史清算、そして真実糾明などに触れている。カミカゼ＝親日と規定する光復会や地元住民を主に取り上げており、一部は市長の専横を批判しながら歴史的事実をめぐる民主的討論を求めている。先述した『竹林はるか遠く―日本人少女ヨーコの戦争体験記』とは異なり、朝鮮人特攻隊員に対する態度は韓国の中でも意見が割れており、どちらも主導的記憶を持ち得ていない。黒田が長く準備しながら事情を公開したにもかかわらず、適切な対応や討論はなかった上、事件後にも討論していないことも記憶を主導する言説が決まっていないことがその理由である。

4. アジア的「記憶の場所」

『竹林はるか遠く―日本人少女ヨーコの戦争体験記』は引揚げの物語であるとはっきりと広告されている。著者が本書を引き上げ文学の範疇に入れているわけではないが、引揚げ文学の範疇内であることを否定することもできないと思われる。しかし、韓国では「引揚げ」という文言が抜けている。もちろん記憶の範疇にも「引揚げ」は存在しない。解放当時、朝鮮外にいた朝鮮人が朝鮮に帰ってくることを帰国、または帰郷と表現しており、引揚げとは言わなかった。日本人の引揚げに関するエッセイなどが韓国に翻訳・紹介された例は限定的である。朝鮮人の善処をたたえる内容でなければなかなか紹介されないのである。そのため、満洲から朝鮮を経て日本へ、または朝鮮から日本へ渡って帰った日本の民間人の苦痛は韓国人の記憶の範疇に入っていない。それどころか、日本に帰ることができず、今も韓国に残っている日本人妻の記憶も語られることがない。1945 年 8 月 15 日に関する記憶が異なるように、8・15 前後に起きた民族の歩み方も自民族中心に記憶されている。『竹林はるか遠く―日本人少女ヨーコの戦争体験記』が脱歴史化されているように、韓国における犠牲者としての民族主義叙事も脱歴史化されている。

朝鮮人特攻隊に対する記憶を主導する叙事は日本には存在する。ノスタルジア的な視点でも、天皇主義に占有される右翼的努力でも、リベラルな立場でも、どれもが朝鮮人特攻隊員を「慰霊」の対象として扱う記憶を持つ。しかし、まだ韓国は明白な記憶を持っていない。韓国のテレビドキュメンタリー、研究論文、小説などは発表されているが、彼らの存在を知らせて史実を確保するところにとどまっている。親日者の糾明作業を行った民族問題研究所も彼らを親日リストに載せることを留保している。朝鮮人特攻隊員に対する記憶は民族（日本／韓国）、空間（中央／地域）によって分かれている。

冒頭で、記憶は生存の方式であると述べた。記憶なくしては社会的構成も難しい。それ故、さまざまなかたちで記憶を作って伝えたり、分け合ったり、強制したりする。歴史はそのような記憶の一つの形式である。そのために、記憶は個人的・感性的かつ不正確で大衆のものである反面、歴史は公式的かつ正確で国家中心、権力的であると、記憶と歴史を二項対立的に分ける議論は不適切である。記憶の中には多様な記憶の場所が存在し、その中に記憶の内容を詰め込む作業たち－複数であることに注目－があるのみである。そして、その作業たちにおいて特定の力が作用している。今のところは、まだそのような記憶の過程において民族国家の力が強く作動している。上述した二つの事例からもわかるが、一方で

はこのような面が弱くなっている面もうかがえる（例えば二つ目の朝鮮人特攻隊の事例）。

これまでの 20 年間、「東アジア」言説が人文・社会科学分野で流行してきた。一時停滞気味であったが、中国の孫歌が竹内好の『方法としてのアジア』（1961 年）を再解釈したことで、再び議論が盛り上がっている。韓国では「韓流」を商業主義ではなくトランス・ナショナリズム的資源として活用する可能性を議論しながら、慎重に試みている。上述したピエール・ノラの「記憶の場所」の議論を一国に限定せずに地域へと拡張する作業に該当する。つまり、「太平洋戦争」「引揚げ」「帰郷」「特攻隊員」「朝鮮人特攻隊員」「慰霊」などに対する記憶を地域へと拡張する作業になるのであろう。その内容を詰め込む作業を意味するわけではない。まず、それらの違いをえぐり出し、その淵源を追跡し、差異が持つ意味を整理することを意味する。

二つの「記憶の場所」が単に販売禁止に終わり、米国にその判断を委ね、碑の建立失敗として終わってはいけない。「記憶の場所」で繰り広げられた記憶の戦争を記憶し、新しい「記憶の場所」として誕生させねばならない。国境を超えた「アジア的記憶の場所」にする意志を見せなくてはならない。漫画や映画、ドキュメンタリー、小説、どれでもかまわない。記憶が生存のためのものであるなら、「皆一緒に生存するための」記憶は、記憶と紛争に満ちた今の東アジアにとって切実なものなのである。知識人の有機性（the organic）が過去には一国に限定されていたなら、今やそれを超える時が訪れた。アジア的有機性を発揮する時機になったのである。記憶の戦争を記憶の分有（partage）に変えるためのアジア的有機的知性（Asian Organic Intellectuals）の時代である。

注

1） もちろん、言及した思想家が皆すべて記憶に関する研究者ではない。ただし、本稿では彼らの思想と記憶概念を類推的に連結させてみるというように理解されたい。
2） このような点から見ると、社会科学において「記憶」を阻害させている学問的事件は理解しがたい。デュルケームを近代的社会学の創始者としながら、彼の方法論だけを浮き彫りにしたことは、米国式（実証的機能主義）社会学の結果として見てかまわない。
3） もちろん、レヴィ＝ストロース（C. Lévi-Strauss）やアルチュセール（L. Althusser）などのフランス構造主義の思想家たちは、これさえも権力によって形成された構造（または構造物、イデオロギー）として把握しただろう。そのような点で彼らはホッブズ派に近い。
4） 本稿では、発表者が専門としている文化研究とフランスの一連の思想を比較してみる。
5） 韓国で発刊された翻訳本の裏面には、日本と中国で出版禁止されているという内容が書いてある。出版社に聞いてみたが、その内容をどこから聞いたのか説明してくれなかった。
6） 大部分の書評にも、韓国での販売禁止事件に対するニュースは抜け落ちていなかった。
7） 安部首相は米国訪問に先立って、ホンダの法案通過を防ぐために、歴史的事実を知らせるとして米国の有力新聞に広告を載せた。
8） 2014 年 12 月 7 日付の聯合ニュースは、韓国の大学生が独島を知らせるために米国一周をするという事実を報道した。
9）「アリランの歌声とほく母の国に念ひ残して散りし花花」
10） レヴィ＝ストロースは明らかに両価的範ちゅう（Anomalous Category）に含まれている。